

浜矩子著『『通貨』を知られば世界が読める "1ドル50円時代"は何をもたらすか』PHP ビジネス新書、PHP 研究所 2011年6月8日刊を読む

まったく新しい「円」の時代へ ワクワクするような未来が待っている

1. 高い円が地方を活性化させる!?

- (1)ここで、話を日本と円に戻すことにしよう。1ドル50円時代との付き合い方を考えてみたい。
- (2)何はともあれ、そこには心機一転のための大いなる可能性が秘められている。そのような受け止め方が肝要だと思う。
- (3)心機一転のチャンスは以前にもあった。あのプラザ合意の時がそうだった。あの時に回避してしまった挑戦に、今度こそ挑む意気込みが求められている。
- (4)あの時の日本経済は、今に比べればまだ若かった。それでも成熟度が高まっていた。だが、それでもおよそ30年前であるから、まだ豊かさの形成において道半ばの面を残していた。ジャパン・アズ・ナンバーワンなどと言われて喜んでいた時期だし、少子高齢化が定番用語となっているわけでもなかった。その意味で、輸出立国に執着し、従来路線で突っ走ることにこだわり続けたことにも無理からぬ面があったことは事実だ。
- (5)だが、今度こそ、そうはいかない。その余地もない。超低金利はすでに日常化している。金融大緩和で円高を回避するという技はもう使えない。
- (6)そこでどうするか。ポイントは、今日の日本経済が当面している諸問題と1ドル50円という枠組みをどううまく結び付けていくかだ。
- (7)今の日本にとっての大きな課題は何か。筆頭にあげるべきなのが、地方の活性化問題だろう。震災後復興とのかかわりでも、ここが一つの焦点になる。
- (8)この点で、円高に何を期待できるか。円が高いということは、言うまでもなく、日本の対外購買力が高まることを意味している。海外からモノを買うにしても、知恵を買うにしても、これは有利な要因だ。
- (9)大英帝国時代、パックス・ブリタニカ時代のイギリスは、ポンドの圧倒的な購買力を利用して世界からモノと英知を引き寄せた。決して大きくはない島国国家が、その購買力を基盤に世界を制した。日本の地域経済がそれぞれ小さなイギリスになったつもりで外とのかかわりを強

化していけば、そこに新たな自己展開の余地が生まれるはずだ。日本の地域を地球市場と結び付ける結節部品として、購買力の強い円を活用する道筋があるのではないかと思う。

(10) もっとも、地域の活性化問題には、もう一つの解答が成り立ちうる。それが、後述する地域通貨の導入という方向性だが、これは次章のテーマだ。

(11) そのようにして、地域と地球が直接的に結び付いていくことになれば、やがて、地域は国のバラマキ予算にあまり期待しなくてもいいようになるかもしれない。自己展開の中で独自の豊かさを形成できれば、医療や介護や福祉についても、地域独自の解答を出すことができるようになるはずだ。

2. 円ドル相場に一喜一憂しない日の到来

(1) 円高を一番恐れているのは、輸出を中軸事業とする製造業者のみなさんだ。それはよくわかる。特に1ドル50円が一気に襲ってくれば、その打撃が痛烈なものになることは間違いない。だが、前述の協調型受け入れスタイルで漸進的に来るなら、話はかなり違ってくる。

(2) 漸進的に1ドル50円に接近していくのであれば、その間に円とドルを取り巻く環境はかなり変わってくるはずだ。まずは、日本の貿易取引はそのかなりの部分が円建てになっていくだろう。1ドル50円になるということは、それだけドルに対する需要が低下するということだ。日本のみならず、世界で行われる取引が、全体としてドル離れしていく。だからこそ、ドルの減価が進むということである。

(3) そして、ドル離れはドル離れを呼ぶ。使われなくなればなるほど、そこから先、さらに使われなくなっていくスピードも加速する。

(4) 円建て取引の割合が高まれば、日本企業がドル相場の行方を巡って一喜一憂しなければならぬ度合いもそれだけ低下する。決済にあまり使っていない通貨であれば、その相場水準がどうなっているかを誰もさして気にしない。気にする理由がなくなっていく。

(5) 基軸通貨がその座を降りるとは、要するにこういうことなのである。これは、イギリスのポンド相場のことを考えてみればわかりやすい。

(6) かつてイギリス・ポンドが世界の基軸通貨だった時には、どの国もポンドで取引していたため、ポンド相場を常に意識していた。しかし現在では、円ポンド相場を聞かれて、すぐに答えられる人がどれほどいるだろう。

(7) それでも、引き続きドル建て取引を維持していく国々への輸出は、むしろ、厳しくなっていく。だが、たとえば中国のように今はドルと自国通貨を連動させている国でも、1ドル50円という相場になれば、おそらくドルとの連動は解除に向かうはずである。

3. 世界で初めての、まったく新しい可能性への挑戦

- (1)ここまで通貨の歴史を振り返ってみて、つくづく思うことがある。今のような時代環境の中で、日本ほどのスケールの債権大国が超成熟時代を迎えるというのは、今までなかったことだ。
- (2)そういう意味で、今や、日本の前に前例や先人はいない。これからの日本経済は、自らが実験台となって新天地を切り開いていくしかない。
- (3)強い通貨と豊富な債権、そして知恵と工夫を用いて、いかに豊かな国を築いていくか。前人未到の大人の世界を自力で構築していくのである。これはなかなかワクワク感をともなう状況だ。
- (4)日本が自らを実験台とする実験の主舞台は、やはり地域社会ということになるだろう。そこから発信されていく新しいメッセージに応える形で、日本の政策も政治も変わる。それが日本型ジャスミン革命なのではないか。
- (5)震災からの復興というテーマに直面して、時あたかも、地域の声にいかに応えるかは、待ったなしの政策課題となっている。そこをしっかりと受け止めて、プラザ合意の時に自らの怯みで見送った大変身を成し遂げる。そのための舞台装置が整いつつある。あとはパフォーマンスあるのみだ。ここは一番、芝居心の発揮しどころである。

P192 ~ 197

[コメント]

円高を、裏基軸通貨である円の価値がますます高まっていることと考え、戦略的に1ドル50円の円高を迎えて、そのための準備を整え、日本復興と日本再生、地域経済や人々の生活を豊かにしようという浜先生の考えに賛成したい。外国から人やモノをどれだけ効果的に招き入れることができるか知恵を絞りたい。とりあえずは、地域の人々の英語のコミュニケーション能力を飛躍的に高め、地域の第2公用語を英語にすることか。

- 2011年7月22日 林 明夫記 -